立ち読み版

特集 2

経済学・経済政策で
70点を超える

第1章 出題傾向の把握と求められる思考法

三枝　元
TAC専任講師／中小企業診断士

1 経済学・経済政策の全体像

まず，本科目の全体像を確認しておこう。本科目が設置された平成13年度以来，設問数は25問で変わらない。TAC では，１次試験後に自己採点システム（データリサーチ）で平均点を算出しているが，過去５年間（平成28年度～令和２年度）で最低は62点程度，最高は66点程度，同期間の平均では64点程度だったと記憶している。

もう少し遡ると，過去には平均40点台前半が２回（平成22年度と平成25年度）あり，得点調整が入るなど，難易度の差が激しかったが，近年では極めて高い水準で安定している。

筆者は，本試験の出題内容からして，このような難易度傾向は変わらないと推測している。おそらく，難化したとしても50点台後半くらいだろう。そう考える理由は次の２つである。

・難易度を上げる機会はいくらでもあったはずなのに，平成26年度以降，そうなっていない。
・受験者が選びやすい選択肢を正解にしようという配慮が感じられる（難易度を上げたいのであれば，選びにくいものを正解肢にするだろう）。

直近５年間での平均が64点であるということは，70点以上の高得点の受験者も珍しくはないということだ。これは実際に教室で講義をしていても毎年感じることである。一方で，合格点に及ばない受験者も一定数おり，得点差が激しいとも言える。

いずれにせよ，１次試験科目の中では安定的に平均点が高いことは事実である。受験生の方にはぜひ，経済学・経済政策を他の科目をカバーする得点源としていただきたいと思う。

本科目は，マクロ経済学とミクロ経済学の２つの領域から成る。両者の出題割合は年度によって多少の前後はあるが，平均ではおおよそ２分の１ずつとなっている。

次に，正答率について見てみよう（**図表**）。TAC では，本試験後の自己採点システム（TAC データリサーチ）の集計をもとに，各設問の正答率を20％刻みで把握して，過去問題集に掲載している。

・A ランク⇒正答率80％以上
・B ランク⇒正答率60％以上～80％未満
・C ランク⇒正答率40％以上～60％未満
・D ランク⇒正答率20％以上～40％未満
・E ランク⇒正答率20％未満

全体で見ると，正答率60％以上の問題の構成割合は55％程度，正答率40％以上になると85％にものぼると言える。一貫してミクロ経済学の正答率のほうが高かったが，令和２年度ではマクロ経済学の正答率のほうが高かった。

図表　分野別の正答率60％以上・40％以上の問題の構成割合（該当の問題数/当該分野全問題数）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和２年度
マクロ経済学	AB ランク　：46％ ABC ランク：85％	AB ランク　：33％ ABC ランク：75％	AB ランク　：58％ ABC ランク：83％	AB ランク　：42％ ABC ランク：75％	AB ランク　：77％ ABC ランク：85％
ミクロ経済学	AB ランク　：42％ ABC ランク：92％	AB ランク　：77％ ABC ランク：92％	AB ランク　：58％ ABC ランク：92％	AB ランク　：69％ ABC ランク：100％	AB ランク　：58％ ABC ランク：67％
全体	AB ランク　：44％ ABC ランク：88％	AB ランク　：56％ ABC ランク：84％	AB ランク　：56％ ABC ランク：88％	AB ランク　：56％ ABC ランク：88％	AB ランク　：68％ ABC ランク：76％

出所：TAC 株式会社（中小企業診断士講座）編著『中小企業診断士　2021年度版　最速合格のための第１次試験過去問題集　4　経済学・経済政策』（TAC 出版）より作成

2 領域別の出題内容

出題内容について読者のほとんどの方はご存じだと思うので，詳細は割愛する。詳しくはお手持ちのテキストや，中小企業診断協会の第１次試験案内を参照してほしい。

(1) マクロ経済学

経済統計からの出題が２～３問（平成30年度以降は２問で定着）ある以外は，ほぼ標準的なテキストレベルの問題で占められている（初見の内容は出ても１題程度）。マクロ経済学の場合，理論や解法の知識があれば，ほぼ確実に正解できる。

(2) ミクロ経済学

マクロ経済学と同様，標準的なテキストレベルの問題が多くを占めている。ただし，新たな論点について数題程度，出題される傾向がある。たとえば，２要素生産関数（平成29～令和元年度），エンゲル曲線（平成30年度），蜘蛛の巣調整過程（平成28年度）といったものである。また，余剰分析については，標準的なテキストでは掲載されていないモデルが出題される。

3 経済学の特徴

ここで，そもそも経済学とはどのような特徴があるのか，触れておきたい。特徴を知ることで，その接し方がわかり，対策も進めやすくなる。

経済学というと，主要文系科目の１つと考えられるが，実はその中でも理系科目に近い科目である。数学や物理学のように，ロジカルかつエレガントに，世の中の経済事象や経済活動をモデル化したいという欲求が，経済学の発展を導いてきた。実際の経済学では，複雑な数式を用いて経済モデルを構築する。なお，ここでいうモデルとは，数式あるいはそれを図示したグラフを指す。

一方，診断士試験の受験者の多くは文系出身者である（筆者も同様）。よって，概して数式（グラフ）にあまり慣れておらず，抵抗感を感じてしまう。さらに，このことと関係するが，理論構成が演繹的に展開される。つまり，「A を前提に，B の要素を加えると，C という結論になる」といった具合である。いわゆる三段論法に近い。中にはマンデル＝フレミングモデルのように論理展開が多段階に及ぶものもある。

一方，多くの人間は知識を帰納法的に捉えようとする傾向がある。つまり，学習した知識を身近な環境に当てはめてイメージしようとする。この行為自体は間違ったことではないが，普段，我々はグラフや数式を使って経済活動を行うわけでないため，なかなかイメージしにくいのが現実だ（たとえば，自らの無差別曲線と予算線を想定して買い物をする人は，経済学者も含めて皆無だろう）。さらに，マクロ経済学の金融政策になると，身近に置き換えるのはほとんど不可能だ。

帰納法的に対処できる他の科目とは異なり，演繹的に（ロジカルに）捉えるのが経済学の特徴であり，学習に当たってもその姿勢が求められる。

⇒続きは雑誌で